

報恩講をご縁に(その1)

「報恩講」とは

「報恩講」は、浄土真宗のみ教えをいただく私たちにとって、宗祖・親鸞聖人のご遺徳を偲ぶ、一年でもっとも大切なご法要です。

浄土真宗は、阿弥陀さまのあらゆる人びとを救うはたらきによって信心をめぐまれ、お念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき

浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還って人びとを教化するというみ教えです。この真実のみ教えをお示しくくださった親鸞聖人に感謝し、阿弥陀さまのお救いをあらためて心に深く味わわせていただくご法要が、「報恩講」です。

「報恩講」という名称は、親鸞聖人のひ孫である本願寺第3代覚如上人が、聖人の33回忌にあわせて『報恩講私記』を著されたことに由来しています。以来、700年を超える歴史の中で、先人たちが親鸞聖人ご命日の法要を「報恩講」として脈々と受け継ぎ、今日まで大切にお勤めしてきました。

ぜひ、善教寺本堂や京都の本願寺へご家族や有縁の皆さまといっしょにお参りし、ご家庭でも「報恩講」をお勤めいたしましょう。そして、親鸞聖人のご遺徳を偲び、阿弥陀さまのはたらきに感謝して、浄土真宗との出遇いを深めてまいりましょう。



親鸞聖人御影
(国宝 安城御影 本願寺蔵)

住職レター

「暑さ寒さも彼岸まで…」とは、よく言ったものです。本当に、春のお彼岸を迎えると気持ち良く、毎日がワクワクウキウキしますね。と同時に、そろそろ田植えの準備で忙しくなる頃でしょうか。加えて、お庭や田んぼの畦道に草が生え、草刈りに追われるようになりますね。

このお彼岸中、法事に参勤し、続けてお墓へお参りすると、皆さん口々に、今後が心配だと言われます。今までは、敷地が広がった故に、夫婦墓をそれぞれ建碑し、家によつては約十基も並ぶ墓があったりします。この墓を今後も管理していくのは大変だろうなと、他人事ながら、いつも心配をしてしまいます。

お墓の問題も心配ですが、ここ数年、葬式のあり方も大きく変わってきました。家族葬（近親者のみで執り行われる葬式）が増え、近所の方でさえも、その家の方が亡くなられた事実を知らなかった…と言われることも

あります。通夜葬儀も、今ではほとんど、葬儀会館等で勤まることが多くなりました。

月忌参りの時、ある家の九十歳を超えたおばあちゃんが、私に一言、「私の葬式は家でしてもらいたいんよ…」と。

お墓のあり方、葬儀のあり方、今一度、ご家族皆さままで、よくよく話し合ってみて下さいね。

